

青春スクロール

母校群像記

注目の科学者も／練習漬け馬力養う

平塚江南(以下、江南)からは、注目の科学者も出ている。

東大教授保坂寛(57、1975年卒)＝機械振動学＝は「江南で初めて学ぶ楽しさを知った」と話す。高3で出会った数学教師は、一つの問題に様々な別解を示し、保坂を魅了。他のクラスでの授業まで聞きに行っ



総長補佐も務め、多忙な日々を送る保坂

平塚江南高校 6

たほどだ。「同じ現象を違う理屈で説明、違う現象を同じ形式で表現することで、現象の本質や新たな応用を見いだす」。現在の研究の原点だという。

保坂と同期で筑波大学人間系教授小川園子(57、75年卒)は、吹奏楽部でクラリネットを吹いていた。心理学や歴史にも興味を示し、歴史の先生に進路を相談したら「心理学の方がいい」と背中を押してくれた。筑波大学で心理学を学び、米國留学を経て、今は人間の行動をつかさどるホルモンの働きを研究する行動神

原は、衛星による太陽コロナの研究で、今年の自然科学研究機構若手研究者賞を受賞



経内分泌学を研究している。

太陽の観測衛星開発などを進める国立天文台准教授原弘久(46、86年卒)は、米航空宇宙局(NASA)探査機の火星着陸や、アニメ「宇宙戦艦ヤマト」のブームの中で少年期を過ごす。江南では物理部。文系の

「専門家と社会の相互信頼を構築したい」と語る江守



授業にも感動し、国語教師には、よく職員室に質問に通った。「先生自身が楽しそうに教えてくれ、そこに面白いことがあるのが伝わってきた」

その原と、中学時代に平塚市博物館の観察会で流星を数えていたのが、気象学者で国立環境研究所気候変動リスク評価室長の江守正多(43、88年卒)。高2の時にチェルノブイリ原発事故があり、社会的に重要な問題に科学者としてかわり、情報



昨年度の東工大「挑戦的研究賞」を受賞した宮崎

提供しようと地球温暖化問題に取り組んできた。「江南では輝いていた方じゃなかったなあ」と振り返るが、水泳部の仲間とは今も正月に集まって飲む。

生体力学の手法で人体の構造を再現し、けがのメカニズムを明らかにする東工大准教授宮崎祐介(34、97年卒)。40年来、医師の間で議論があった「乳幼児揺さぶられ症候群」の脳の損傷過程を解明し、TVなどでも話題の研究者だ。

江南の思い出は、サッカー部に尽きる。「鬼顧問」の方針で「恋愛、塾、マネジャー禁止」という練習漬け。修学旅行先にもボールを持って行き、広島・宮島で朝練をした。「なぜあんなに打ち込めたのか」と不思議だったが、一つのことを徹底してやったことが、研究に打ち込む馬力を養ったと思う。

気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第5次評価報告書の主執筆者も務める江守が、地球温暖化問題を論じる近著は「異常気象と人類の選択」(角川SSC新書、9月刊行)。
江南の情報はkanagawa@asahi.comの「青春スクロール江南」係へ。